
ありがちな話。

春華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ありがちな話。

【Nコード】

N 8 7 1 8 W

【作者名】

春華

【あらすじ】

彼にもう一度あつて――

いじめられていた彼を追いかけて、私は同じ高校に進学。しかし、彼は見つけれないし、新しい男子との出会いがあるし、いじめられたり、結構大変。彼は見つけれられるの？

前、正義感の恋です。詳しくは、物語第五話を見てください。

正義の一（前書き）

初めは短編にするつもりでした。でも、思いのほか長くなりそうで、連載にしました！

二作目です。一作目の連載中小説とは打って変わった物語。

どうぞ、宜しくお願いします！

正義のー

中学生の頃……

「何でお前、学校来てんの？学校来なくても、十分勉強出来んじゃないん？」

「わざわざ、友達の居ない学校に来る必要無くな？」

そういう暴言が飛び交うほうを見ていた私に友達は「やめなよ。」と言っ。

「ちよつと……、私行ってくるね。」

そう言っ、友達の忠告も聞かず、そこに飛び込んだ。

「やめなよ。何つまんないことしてんの！！」

彼は、いわゆる“がり勉”で見た目も眼鏡に前髪までかかった前髪と、根暗だった。いじめられる対象としては、これ以上ないほどぴったしなのだ。

だが、私は少々正義感が強くて、“いじめ”ということが嫌いだっ。だから……

「やめなよ。何つまんないことしてんの！！」
という行動に出してしまったのだ。

でも、本当に下らないと思う。

それ一つではれたら内申書は最悪、その時はスカツとくるかもしれないけど、後から思い出したら、いい気分はしないだろう。

けれど、彼をいじめていた人たちには相手にされず、蹴飛ばされて、私は何も出来なかった。

私は彼を助けることが出来なかったのだ……。

だから……、

高校入学式・・・

「いやー良かった！高校一緒だね。」

「ふー・・・ぎりぎりだったよー！」

そんな風に言い合い、皆テンションが上がっている。

私、中森 なかもり 喜弓 きゆみ はそんな中、一人下を見ながら、とぼとぼ歩いている。

高校生のとき、助けられなかった名前も知らない彼。そんな彼のせめてもの償いとして、私は彼のように、ダテ眼鏡をかけ、根暗になり、いかにも勉強しかしてません！と、いような外見にした。勉強も本気で頑張り、友達のいない遠くの高校に入学。

ともかくも、私はいじめられるために来たのだ！そして、私をいじめた相手を死にたいと思うほど後悔させ、彼をいじめそうな人を少しでも減らすのだ！がり勉をなめるなよ！と、言うのだ。

そんな事を思いながら歩いている私を、周囲の人は、

「うわー、ださっ！今時あんなのはじめて見た！」

なんて、言っている。よしよし、いいぞ！

教室に入っても、一人席にポツンと座り、根暗そうな私の反応も変わらず。

そんな中、かっこいい人が教室に入ってくる。

クラスの女子はもちろん、目をハートにさせて、彼に近づこうと

する。

彼は、明るく、

「皆さん！よろしく。紀綱^{きこう} 須美夜^{すみや}です。」

と、ニコつと笑って大声で言う。

そんな中私は、ああいう一見明るそうな奴ががり勉をいじめるんだよな。とか思っていた。実際、名も知らない彼をいじめたのは、クラスで人気者の奴だった。まあ、いい。こっちはいじめられるために来たのだ。と、皆にばれない程度にニヤつとする。

一瞬、彼がこっちを見た気がした。だが、それはきつと、いじめられそうな奴が居ると思ったんだろ。いいぞ！と私は思った。

――――

俺、機構 須美夜は中学のときいじめられていた。

だから、高校はもともと頭は悪くなかったので、遠くを選んだ。

そんな中、思い出すのは俺を助けてくれた彼女のこと。

普段、人目のつかないところでいじめを受けていたが、たまたま、そこに人が通りかかった。女の子二人で、助けてくれるかと思った。だが、無駄だ。いじめられている奴をわざわざ助けるような馬鹿はいないだろう。そう思ったが・・・、

「やめなよ。何つまんないことしてんの！」

と言う声が前から聞こえた。びっくりして前を見ると、女の子が一人、俺を庇うように立っていた。

後から知ったのだが、彼女は中森 喜弓という名前で、その後も何度か俺をいじめていた奴に、やめてくれと言ってくれていたそう。

結局、いじめは止まることはなかったのだが、それでも、彼女に

感謝していた。

もう、そんな人に迷惑をかけまいと、俺は長かった前髪を切り、眼鏡も外した。

高校の入学式。

俺は指定された教室に入った。すると、目の先に眼鏡をかけ、下を向いた、昔の俺みたいな女の子がいた。

その彼女が少し顔を上げた。すると、その顔は知った顔で、可愛く、整った顔の中森 喜弓だった。

だが、その可愛い顔も眼鏡と、根暗そうな外見で隠れてしまっていた。せつかく可愛いのに……。そう思った。

俺は、彼女にお礼を言おうと思った。中学生のときはいろいろあって、結局言えなかったのだから。

その後、一ヶ月がたったが、彼女は根暗で、いつも一人でとぼとぼ歩いていて、どうも話しかけづらかった。

そして、気づいたこと。彼女は自分を覚えていない。何となく悲しくなった……。それと、もう一つ

思ったこと。いきなりお礼を言っても彼女は分からない「言っても意味ない！どうしよう……」。

だが、根暗な彼女は友達が居なかった。俺は、高校で明るく立ち回り、たくさんの友達が居た。

だから、彼女がせめて一人にならないように。俺に出来るのはそれしかないと思い、それを行動に移すことにした。

正義のー(後書き)

ありがとうございました！

誤字脱字その他の指摘、感想お願いします！

次回も宜しく願います！

正義の二（前書き）

うやっほーい！！・・・あ、すいません。いやーこんな小説に
気に入って登録して下さる方がいて・・・まだ一話しか投稿してな
かったのに・・・やばいです！最近で一番嬉しいです！本当に
ありがとうございます！

えーと・・・それで、一部訂正しました！中森 喜弓なのに、中
森 喜々奈になってる部分がありました。・・・すみません。実は
初期は喜々奈だったんです。でも、少し理由があって喜弓にしまし
た。

では、今回も宜しくお願いします！（前書きが長くなってしま
いました・・・）

正義の二

現在五月。実に入学して一ヶ月たった。だが・・・

「いじめられない!!」

と、中森^{なかもり}喜弓^{きゆみ}は自宅で嘆いていた。

現在私は、学校の、後ろの低いところで一つに結んでいる髪型を
ほどき、ダテ眼鏡を外して、普段の格好になっている。

そう、どんなに頑張って根暗な外見にしても、私は未だいじめられていなかった。

私は、入学式前日の日記帳をめくる。そこには、こう書いてあった。

「四月六日 明日はいよいよ高校入学式！中学のとき、いじめられているのを助けられなかった彼に償える日が訪れようとしている！彼を馬鹿にしそうな奴を少しでも減らすため、私は彼のようになり、私をいじめたやつにギャフンと言わせてやるのだ！頑張るぞ！」

それを読み、これじゃ、彼に償えないよ・・・と、私はベッドに体を投げる。

はぁ・・・、どうすればいいんだろ？

そう考えていたとき、下から声がかかる。

「喜弓。ちょっとコンビニ行ってきた！」

私はそれに適当に返事をして、何も考えず、外に出た。

私は近くのコンビニにより、お母さんの注文したものを探す。

と、その途中で最悪なことに気づく。何と、紀綱^{きこう}須美夜^{すみや}が同じコンビニ内にいたのだ！

私は何となく紀綱 須美夜が苦手だ。

中学時代、彼をいじめていた奴に何となく雰囲気似ていたから。かつこいい外見に、いつだって笑顔の顔。勉強もそこそこ出来て、

およそ非の打ち所がない人。彼をいじめていた奴もそうだった。クルスの人気者だった。だが、裏ではアレだ。どうせ、こいつも一緒だろう。・・・そんな変な先入観があった。

どうしよう・・・、ばれるか？・・・そう思ったが、落ち着いて考えると、少し長い前髪はピンで止めてるし、学校の私とは大違いだ。ばれることはないだろう。

そう考えると特に気にすることもなく、さっさとお使いを済ませようと、目的のものを探す。

お母さんの注文全てを買い終わりコンビニを出ようとしたとき、紀綱 須美夜も漫画雑誌の立ち読みを終え、コンビニから出ようとしていて、偶然、紀綱 須美夜ぶつかってしまった。

さすがに近距離で見たらばれるか？そう思ったが、向こうは気づいていないらしく、

「ああ・・・、ごめんね？」

と言い、私の荷物を拾って去って行く。「ああ」と「ごめんね」の間に、少々間があった気がしたが、気のせいだろう。

早く帰らなきゃ・・・。じゃなきゃ、お母さんに「遅い！」とか文句言われる・・・。そう思い、家路を急いだ。

――

紀綱 須美夜は考えていた。

“彼女を一人にしない。”

そう決めてから大分たっているが、彼女には結局は話しかけられないまま。

むしろ、彼女は一人になろうとしている気がするのだが、気のせいなのだろうか？

「どうすりゃいいかな・・・？」

そっぴいながら、椅子の背もたれによしかかり、天井を見る。

彼女が一人で居たいのなら、それを止める権利など誰にもないわけ。でも、彼女は中学時代、常に友達と一緒にだった。なら、一人で居たいというのはないと思う。それに、もし一人がいいのなら、その理由は何だろう？

うーんと、一生懸命考えるが、結局答えは出ず・・・。

「母さん、ちよつと外行ってくる。」

仕方がないから外で気分転換でもしようとして、コンビニで漫画を読むことにする。

コンビニに向かう途中でも考えていた。

―どうしたら、彼女に声をかけられるだろうか？

コンビニで漫画雑誌を手に取り、ぱらぱらとページをめくる。手に取ったのは有名な少年漫画雑誌で、ファンタジーなど、ありえないようだが、面白い漫画が数多く載っていた。

その中で、少し目を引いたのはこんな話。

「ある女の子がいじめられていて、それを助けたのは超能力を持った男の子。彼は彼女をいじめていた子達をもつとも言わず、気迫で倒し、それを見た女の子がその能力に興味を持って、それを手に入れようとする」

それを見て、少し性別などが違うものの、俺たちみたいだと思う。

その話を途中まで見て、ふと時計を見ると結構時間が経っていたことに気づく。

そろそろ帰るか・・・、そう思い、コンビニを出ようとしたとき、女の子とぶつかってしまった。

「ああ。」

と、そこまで言い、その女の子の顔を見ると、いつもの学校の格好とは違い前髪を上げて、眼鏡も外して髪もほどいていたが、その子は中森 喜弓で。

少し驚いたが、彼女は俺に気づいていないようだったので、ここで俺が「お！中森じゃん！」とか言っても、嫌悪感を丸出しにした顔を見せられるだけだろうと思い、気づかない振りして、

「ごめんね？」

と言い、ぶつかった拍子に落としてしまった彼女の荷物を拾ってその場を去る。

この時、やっぱり可愛いのに、なぜあんなに長い前髪を上げないんだ？と思った。

だがしかし、声はかけられたが、相手が気づいていないんじゃない、しょうがない。

俺は少し情けなくなりながら、家路についた。

――――

コンビニから帰ると、案の定、お母さんに「遅い！」と言われ、「行っただから、文句言うな！」

と言い返し、注文された品を渡して、上に上がろうとしたとき有名な、誰でも一度は聞いた事のあるだろう少年漫画雑誌のコマーシャルテレビで流れていた。

少し耳に挟んだところによると、こんなコマーシャルだった。

「週間少年……の……先生の連載！ある日、いじめられていた……を助けたのは、超能力を持った少年！？その少年に憧れ、少女は少年と同じ超能力を身に着けようとする！……」
少年漫画は滅多に読まないが、その内容はまるで、彼と私みたい

だなあと、少し思った。

だが、大して内容以外に興味なくそのまま自分の部屋に向かう。
そして、こんなコマーシャルを見たもんだから、なおさら強くな
った思い。

「早くいじめられて、彼に償わなくては！」

明日も頑張ろうと、新たな決意を固めた。

――

ちなみに、紀綱 須美夜がコンビニで立ち読みし、中森 喜弓が
家でコマーシャルで小耳に挟んだこの漫画。

この漫画はそこそこヒットし、長期連載の仲間に入るだろう長さを
連載した。この漫画の最後のほう、少女は見事超能力のマスター
になり、少女を助けた少年と恋仲になった。

しかし、この話は二人は知る由もなかった。

正義の二（後書き）

最後のほう、少し最終回っぽかったかも？

この漫画を軸に進めても良かったのですが、それじゃあ“正義感の恋”の題名がまったくの無意味になってしまうのでやめました。

さてさて、こんな感じでまだまだ話は続きます！これじゃ、やっぱり短編になんて無理でしたね！

このような小説を読んでくださってありがとうございます！次回もぜひ、お願いします！（すいません。今回少し短かったですね・・・）

正義の三（前書き）

うわゝ、大分遅くなってる・・・。

ほんつと申し訳ありません。

今、テスト期間なんで、また遅くなるかもしれません・・・。テスト
終わったら必ず！

正義の三

現在五月。と、言えば・・・

「では、皆さん。もうすぐ中間テストです！」

なかもり 中森 きゆみ 喜弓は、よっしゃと思う。

なぜなら、いじめられて彼に償うためには、いじめられる要素たつぷりの女の子にならなければいけない。がり勉、根暗とくれば、絶対いじめられるに決まっているのだ。

中学時代はそんなに勉強は出来なかったが、彼に償うため！そう思い、必死に勉強して、きっと誰よりも頭が良くなっているはずだ。絶対、NO.1になる！そのために、もう勉強は一ヶ月前から始めている。

「よし！頑張るぞ」

私は心の中で、改めて決意を固めた。

中間テスト、結果発表・・・。

「すげー。さすがだな」

「はあ、かつこいいな・・・」

「あいつ、弱点ねえんじゃねえ？」

『きこう 紀綱 すみや 須美夜』

一位は、紀綱 須美夜だった。

私は、誰よりも勉強したつもりだ。なのに・・・なのに！

「一位は、紀綱 須美夜だとう！」

私は、自宅で叫んだ。

しかも、私は・・・

――

――――

紀綱^{きこう} 須美夜^{すみや}は、現在、少し喜んでいた。

「うん。やっと中森 喜弓に話しかけられた。」

そう、高校入学してからの目標を一つ達成していた。

中間テスト、結果発表。

俺は、そんなに興味なくて見に行かなかった。すると、友達が結果を教えるに来て、

「すごいな、須美夜！ちょっと憎いぞ」

初めは何を言われているのか分からなくて、疑問を抱いた顔をしていたら、

「お前、一位だぞ！」

「へえ……でも、俺勉強頑張らなかったら、何もいいところなくなるだろ？」

「なんだと！このやる〜」

そう言つて、笑いあつて、昼になったから、昼食を買いに行つた。

すると、階段の隅で、中森 喜弓が泣いていた。

中森 喜弓は俺がそばによるだけで、なぜだか怪訝な顔をする。

だから、話しかけたら、もっと怪訝な顔をするんだろうなあ、と思つたが、さすがにほつておけないし、いい機会だから、話しかけた。

「あの……中森さん？大丈夫？」

思つた通り、バツと顔を上げ、怪訝な顔をされたが、ええい負けるかと思い、隣に座つた。

「どうして、泣いてるの？」

すると、びっくりするような大声で、

「あんたに一番を取られたからでしょう！」

と、叫ばれてしまった。

「……なんで、そんなに一番になりたいの？」

すると、中森 喜弓は

「何でだっていいじゃない!」

と言って、どこかに行ってしまった。

変な会話の終わり方だが、とりあえず、話は出来た。

「よし、もっと話をいっぱいするぞ!」

そう、次の目標を立てた。

――

ああ、不覚!

「紀綱 須美夜に泣き顔を見られてしまうなんて!」

ん?でも、もしかして・・・

「紀綱 須美夜が私をいじめてくれるかも・・・?」

そんな、考えを抱き、なんとなく明日の学校を楽しみにした。

正義の三（後書き）

短っ・・・!!

すいません・・・。今度こそ、長い話を・・・!

では、読んでくれてありがとうございました!

正義の四（前書き）

あああああ！！！ちよー遅くなってるううう！！！！

ごめんなさい！すいませーん！

これからは、もっと早く！チーターの様に更新します！（それは無理だろ・・・）

正義の四

例えば、かつこよくて、優しそうで、運動もできて、学年一位。そんな人が居たら、誰だって惚れてしまうだろう。

でも、私、なかもり中森 きゆみ喜弓はそうは思わない。だって、そういう奴が影で人をいじめているのを見てしまったから。

そして思う。そういう奴は誰だっていじめっ子だろうと。なのに・

「なんで私のことをいじめないんだ！」

1

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11

「なんで私のことをいじめないんだ！」

そんな、「あんたMですか？」な発言をされて、人が一番初めてとる行動はなんだろう？

答え、

「え？」

困る。

「ここは、体育館裏。今は放課後だ。そして、いきなり初めのいじめろ発言をされた。」

そう、俺、紀綱きこう須美夜すみやは困った。

いや、困らない人などいないだろう。

「えーと……、どうして俺が中森さんをいじめるの？」

「だって！根暗で、眼鏡で、がり勉ときたら、あなたみたいな完璧君はいじめる以外道はないでしょう！！」

なんだか、おかしいな考えた。別にいじめる以外にも道はあると思

できないことだとしても、やりたいの。」

そうでなければ、あの子とのつながりがなくなってしまっから。名前も知らないから、次あって、何もかける言葉がなくなってしまっから。

すると、紀綱 須美夜は仕方がないといっかんじのため息をついて、

「後悔しないんだね。・・・じゃあ、いいよ。いじめられるように仕向ける。本当に、知らないよ」

そう言って、さっさと去っってしまった。

「どうやるんだろっ・・・」

けれど、もうすぐいじめられるのだ。

正義の四（後書き）

ああ、またもや短くなってしまいました。

まあ、物語は少し進みましたね。

この後の展開で、リクエストがあったら、いくらでも言うてくださいますし。

読んでくれて、ありがとうございました！

第一話 出会い（前書き）

はい、長らく置いてしまいました。

さて、なぜ前の話をやめたかというと、実はあの話、何も考えないで創った話なんです。それで、進んでいくにつれて、何を書いていかかわからなくなったので、新たに作り直しました。

前の話は残しておきます。（消し方が分からないだけです・・・）

どうか、新しい人たちも宜しく願います。

第一話 出会い

「・・・っがぁ!!」

そんな苦しそうな声が聞こえて、思わずその声がしたほうへ向かう。すると、数人の男子に囲まれて、首を絞められている男子がいた。

そんな光景をみて、何もしないのはおかしい。人を呼びに行こうとして職員室に向かおうと、走り出した。

しかし、そこに空き缶があつて、けつてしまい、音を立ててしまった。

気づいた男子たちが、こっちに向かってくる。

「おい、まさか見てないだろうな！お前、ちくつたらどうなるか分かってんのか？」

声を荒げてそんなことを言ってくる。それは、素直に怖かった。

すると、そこへ先生がやってきた。まさに、天の助け。先生にばれるのが嫌な男子たちはその場から引いていった。・・・その男子を置いていつて。

「あの・・・大丈夫？」

首を絞められていた彼は苦しそうに倒れていた。時折、ひゅーひゅーと言っている。

「・・・・・・・・ごめんなさい。私、助けを呼びに行こうとして・・・」

言い訳に聞こえるだろうか。私のとった行動は、逃げようとしているものに見えるものだっただろうと、いまさら思う。

すると、苦しそうな顔でニコツと笑って、まだ出しづらいであろう声で、

「逃げても・・・・・・・・よかつ・・たんだよ」

そんなことを言われても、何を返していいかわからなかった。

彼が、階段に座って続ける。

「皆・・・・・・・・いらいら・・している・・だ。受験・・でね。僕が・・早くに・・決まったから・・ね。」

「高校、推薦か・・。どこに行くの？」

すると、彼が持っていた荷物の中から、チラシを見せた。

「・・・水風^{みずなぎ}高校か。結構いいところだね。」

そういうと、彼はニコツと笑って、

「・・・うん。まだ、結構、苦しいけど・・・平気、そうだ。じやあ、もう行くね。」

そう言っつて、彼は立ち上がった。

私は彼にチラシを返した。

「僕の名前は、新庄^{しんじょう} 誠司^{せいじ}。ありがとう、助けてくれて」

そう、まだかすれる、小さい声で言っつて、立ち去ってしまった。

「ありがとう、か・・・」

・・・私、何もしてないのにな・・・。

「新庄 誠司。水風高校か・・・。うん」

彼に、もう一度会いたい。何かを話したい・・・。

そして、四月。

私は、しりつすいもんばしなぎかせこうとうがっこう私立水門橋風風高等学校、
通称、水風高校の新生として、
門の前に立っている。 - - - -

つづく

第一話 出会い（後書き）

はい。もう全く別人が出てますね。喜弓たちも同じ高校に通っています。パラレルワールドってやつです。

じゃあ、登場人物の紹介

私

身長 160cm

体重 45キロ

特徴 かわいい。黒髪長髪。ストレート。

名前はまた次回。出すの忘れてました……。主人公です。

新庄 誠司

身長 173cm

体重 54キロ

特徴 前髪が長くて、目が隠れています。髪は少し茶色っぽい。地毛です。ヒーローです。

はい。高校になってこいつはずいぶん変わります。お楽しみに。

では、ありがとうございました。次回も宜しくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8718w/>

ありがちな話。

2011年11月21日12時38分発行